
機動戦士ガンダム 逆襲のシャア サイコフレームの導き

Hi-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア サイコフレームの導き

【コード】

N0118V

【作者名】

H i -

【あらすじ】

U・C・93、アムロはシャアの脱出ポッドを捕らえたままアクシズの軌道をかえたあと、自分の愛機、シャアの脱出ポッドと共に行方不明になっていた……。しかし、二人は生きていた。別の世界で……。

プロローグ それぞれの世界（前書き）

初投稿です。

こういうのは初めてなので下手ですが、暖かい目で見守っていただけると助かります。

よろしく願います！

プロローグ それぞれの世界

「ララア・スンは私の母になってくれるかもしれない女性だ！
そのララアを殺したお前が言えたことか！」

赤い脱出ポッドに乗った男はそう言った。

「お母さん！？ララアが・・・？ うわっ！」

白いMSに乗った男が言った直後、その機体と脱出ポッドを優しい
光が包み込んだ。

そして、巨大隕石「アクシズ」は軌道をかえ、二人の男は行方不明
になった・・・

「今日も平和ですね、織斑先生。」

「ああ、そうだな。」

ここ、IS学園に勤務している織斑千冬と山田真耶は、そんなのど
かな時間を過ごしていた。

これから起こることを何も知らずに・・・

ブローグ それぞれの世界（後書き）

ブローグにしては短かったでしょうか・・・

第1話 たどり着いたのは異世界(前書き)

今日も頑張っています！

早くガンダム出したいなあ・・・

第1話 たどり着いたのは異世界

「もうすぐですねえ、入学式。」

真耶は笑顔で言った。

「そうですね……。また厄介な生徒を相手にすると思うと、頭が痛くなります……。」

それに対して、千冬は頭を抱えながらため息をついて言った。

その次の瞬間、警報が鳴り響いた。

ビイイイー、ビイイイー

「け、警報!?!」

「何が起きたッ!?!」

「お、織斑先生!! IS学園に近づいてくるものがッ!?!」

「何ッ!?!」

千冬と真耶はモニターで接近する物体を確認した。

「これは……。」

「アイ……。エス……。?」

しかし、接近する物体である、白い機体は千冬達が知っているISよりも、とてつもなく巨大だった・・・

「んん・・・」

ふと男は目が醒めた。見覚えのない天井が広がっていた。

(ここは・・・?)

どうやら、ここは医務室らしい。多くの医療器具が置いてある。

(部屋・・・? おかしい・・・おれは宇宙でアクシズを押し出していて・・・)

段々意識がはつきりいていく。男は、何となく隣のベットを見る。すると、そこには・・・

「!! シヤアッ!!」

男はベットから跳ね起きて叫んだ。

隣のベットに寝ていたのは、この男のライバルであり、地球にアクシズを落とそうとした張本人、「シヤア・アズナブル」であった。

「貴様が何故ここにいる!!」

男の怒鳴り声で、シヤアは目覚める。

「・・・? アムロ・・・か・・・?」

読者の方々は、既にお気づきになっていると思うが、
シヤアに怒鳴ったこの男こそが地球をアクシズの衝突から救った、
ガンダムのパイロット、「アムロ・レイ」である。

シヤアは、まだ今の状況を理解できていないらしい。
体をゆっくり起こして、周囲を見渡している。

（そうだ・・・！ 地球はッ！？）

アムロはベットから降りて、外の様子を確認する。
しかし、外は何事もなかったかのように、平穏な時が流れている。

（押し出せたのか・・・？ アクシズを・・・）

アムロは半信半疑だった。

もう一度外の様子を確認して、アクシズは地球に落ちていないと判
断した。

まあ、ここは異世界なので、落ちていないのは当たり前なのだが・

「どうやらお前はアクシズを押し出したようだな、アムロ。」

シヤアは、笑みを浮かべながら言った。

「だから言っただろう・・・！ やってみなければわからんと・・・」

アムロは強く言った。

「今、考えてみると、お前の言っていることが分かる気がするよ・・・」

「・

「何……?」

シャアの言ったことに、アムロは戸惑いを隠せなかった。

今まで自分のエゴを押し通していたシャアが、いきなりアムロの考えに納得したからである。

「…… 何故そう思える……?」

アムロは質問した。すると、シャアは窓際のほうに寄り添って言った。

「ララアに会って話をした。」

「ララアに会ったのか……」

「ああ……」

〈シャアの回想〉

「…… ここは……?」

「フフフツ…… 大佐……。」

「! ララア!!!」

「大佐、あなたは純粹です。でも、間違った道を渡ろうとしている・
」

「何だと!!」

「大佐、人は変われます……。いつか、人と人が分かり合える時が来るはずですよ。」

「ラリアまでそんなことをいうのかッ!! 私はもう待てん!!」

「大佐、私もアムロと分かり合えることができました。」

アムロと大佐が協力すれば、いつかきっと世界の人々に人の心の光を見せられる日が来ます。」

「……私にそんなことが出来るだろうか……」

「二人ならできます。絶対に……」

「……本当は私も信じたいんだ……、人の心の光を……」

「そう思えるのなら、迷う必要はありません。自分を信じてください。」

「そうか……」

「大佐……今のその気持ち、忘れないでください……アムロもわかってくれるはずですよ。」

「……もう一度信じてみようと思う……」

「よかった……フッフ……大佐、私はもう行かなければいけません……」

「……」

「最後にひとつだけ…… 私はいつでも大佐とアムロの味方ですからね……」

「ああ。 ララア、ありがとう……。」

「フフフフ……フフフフ……」

〈回想終了〉

「そうだったのか……。 ララアが……」

アムロはその話を聞いて納得した。

「だが、私は自分のエゴのせいで多くの人の命を奪ってしまった……。」

シャアの目が涙で光った。

「その人たちのためにも、この世界を一緒に変えよう……。それがシャアにできる罪滅ぼしだ。」

アムロはシャアの肩に手を添える。

「そうだな……。 アムロ……すまないが、一緒に協力してくれないか……。」

「こうしてやつと分かり合えたんだ……、もちろんだよ。」

アムロとシャアはかたい握手をかわす……
こうして、アムロとシャアは長い時間をかけ、ついにライバルから
真の同志となった……

しかし、まだ忘れてはいけなことがあった。それは……

「それにしても……、ここはいったいどこなんだ……」

「そういえば…… すっかり忘れていたな……」

「……ん？ シャア……、今気付いたんだが、なんか若返って
いないか……？」

「何……？ そういうアムロも、この前より身長が縮んでいない
か……？」

「一体どうなっているんだ……？」

「うむ……」

若返っていることに気付いた二人は、ふと医務室のカレンダーを見
た。

そこには、とんでもないことが記されていた……

「そ……、そんな……」

「なんとということだ……」

カレンダーに記されていた暦は……

二人の知っている「宇宙世紀」ではなく・・・
その遙か昔に終わった一つ前の暦である・・・、

「西暦」だった・・・

第1話 たどり着いたのは異世界（後書き）

つ・・・疲れた・・・。

一回データが消えてしまって、更新が遅れました。

すみません・・・

次回から、千冬さんがアムロ達と対面しますよ～～～

アムロ「お楽しみに!!！」

第2話 事情聴取（前書き）

更新、遅れて申し訳ありませんでした・・・

今回のお話では、アムロ達と千冬が会話をします。

アムロとシャアがニュータイプ能力で会話（以後、NT会話と表記）したり、

ガンダムとサザビーのことを話しますよ）

第2話 事情聴取

「シャア……、西暦って……」

「ああ、宇宙世紀になる前の暦だ……しかし、何故……」

二人はしばらく考えて、ひとつの答えを導き出した。

「まさか……ここは異世界だともいうのか？」

「異世界……。その可能性もなくはないな……」

「しかし、そんなありえないことがあるのか……？」

「アムロ、この世界にはまだ解明されていない不思議なことがたくさんある……。あの時だって、アムロや皆の思いにサイコフレームが反応して、アクシズが押し返されただろう。」

「確かに……」

「やっと目が覚めたようだな。」

「「!!」」

アムロ達のいる医務室に一人の女性が入ってきた。

（なんなんだ!? このプレッシャーはッ!?)

（この感じ……ただ者ではないな……!)

アムロ達は警戒しつつも、話をすることを試みた。

「あなたは・・・？」

アムロは女性に聞いてみた。

「私は、織斑千冬だ。ここ、IS学園の教師を勤めている。ちなみに、この学園に落下して気絶していたお前たちをここへ運んだのも私だ。」

その女性、千冬は答えた。

(IS学園・・・?)

アムロはその施設に聞き覚えがなかった。だが、そんなことをずっと考えていても仕方がない。こちらでも敬礼をして自己紹介をした。

「申し遅れました。地球連邦軍外郭新興部隊ロンド・ベル所属のアムロ・レイ大尉です。」

保護していただき、ありがとうございます。」

「ネオ・ジオン軍総師のシャア・アズナブル大佐だ。保護を感謝する。」

(やはり、軍人なのか……。だが、地球連邦にネオ・ジオン・・・？あのデータにもあったが・・・)

千冬は二人の挨拶を聞いていて、そう思った。

「まず、我々に対して敵意はあるか？」

「いえ、ありません。私達も気が付いたらここにたどり着いてしまったので、正直、なにが起こったのか……」

「そうか……」

千冬は、アムロとシャアの目を見ながらそう言った。

（嘘をついている様にはみえないな……。しかし……）

その後、アムロはNT会話を使って、シャアに聞いてみた。

「シャアはIS学園を知っているか？」

「いや、私もそのような施設に聞き覚えはない。」

「どうやら、シャアにも分からないようだ。」

「ひとつ聞きたいのだが、IS学園とはどのような施設なのか教えていただけないか？」

シャアは千冬に学園の事について質問してみた。

（IS学園を知らない……。？ まさか、本当に……）

千冬はそうおもいながらもあることを聞いてみた。

「では、IS……。インフィニット・ストラトスは知っているか

「？」

「いや、聞き覚えがない。」

「私も知りません。」

「知らないのか!？」

二人の返答に対して、さすがの千冬も驚愕した。

「アムロ、どうやらISというのは一般常識のようだな・・・」

「ああ・・・」

アムロ達は千冬を見て、そう思った。

(一般常識と言ってもいいISを知らない・・・やはり、この二人は・・・)

千冬はそう思った後、二人にとんでもない質問をすることにした。

「ISや学園のことを話す前に、もうひとつだけ聞きたいことがある。お前達二人は、この世界の人間ではないのではないか？」

「「!!」「」」

アムロ達の表情が変わった。

「何故、それを・・・？」

「やはり、そうなのか・・・ 先程、二人の機体を調べさせてもらった。そしたら、二人の個人データと機体データ、そしてある記録映像が見つかった。記録映像だけは、二人にも確認してもらっため、まだ見ていない。」

「そうですか・・・。それで、ガンダム・・・私達の機体は・・・？」

「安心しろ。二人の機体は、学園の臨時格納庫に格納してある。」

「そうでしたか・・・ ありがとうございます。」

「手間をかけさせて申し訳ない。感謝する。」

アムロとシャアは軍人の癖でつつい敬礼してしまう。

「うむ・・・。やはり軍人だな。敬礼がしっかりしている。」

千冬は、頷きながら言った。

「それはどうも・・・。」

「それで、映像は？」

「映像は、この医務室の近くの会議室で見る。移動するぞ。」

そして、3人は医務室を出て、会議室へ。

「これがその映像だ・・・。」

スクリーンに、あの時の戦闘が映し出される・・・

「・・・」

「・・・」

アムロとシヤアは黙ってその映像を見る。

「このくらいッ！ー！！」

「サーベルのパワーが負けている・・・?!ええいッ！」

ガンダムがサザビーを攻撃する。

「なんと！」

「シヤアッ！ー！！」

「貴様がいなければ・・・！」

「ア、アムロッ！ー！！」

「うおおおおおおおッ！ー！！」

ガンダムがサザビーを素手で殴る。

「モニターが、死ぬ・・・?!何いッ?!」

サザビーが大破し、脱出ポッドが放り出される。

「逃がすかよ！」

「捕まった・・・?!しかし、もう遅い・・・！」

この時にはもう既に、アクシズは地球の引力に引かれていた・・・

第2話 事情聴取（後書き）

すみません・・・現在スランプ状態（もう?!）です。
でも、頑張つて更新しますので、応援よろしくお願いしますッ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0118v/>

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア サイコフレームの導き

2011年10月2日22時05分発行